御坂/芦川·濁沢

遡行日:09年7月26日

メンバー:三井(L、記録) 志満

先週の「奥聖の滝沢」は梅雨明けの好 天に恵まれる八ズだったのに、梅雨を 引きずった冴えない天気と、仮泊した キャンプ場での予想もしなかったトラ ブルで惨憺たるものになってしまった。 このままでは気が治まらない。どこか 楽しくて快適な沢にいって気分なおし をしよう、という事になって週末の湯 檜曽川・「大倉沢」が決まる。

しかし山の神は我々に微笑んではくれない。その後も相変わらず降ったり止んだりのハッキリしない天気が続き、ぎりぎりまで天気の回復を期待したのだが結局、大倉沢も諦めざるを得なくなり、とどのつまりは近場でマズマズ楽しめる沢として「濁沢」に行く事とした。

予報は決して芳しくはなかったがまず まずの天気で、一部青空もでていてこ れなら何とかなるか。

出合いは貧相な小沢で、食指の動くようなものではない。この沢は以前遡行した事はあり、余り記憶は残っていないがつまらない沢ではなかったとは思う。

入渓してすぐに右に折れるのだが、いきなり3段50mの大滝と出合う。中々立派な滝で悪くない。傾斜は緩いがヌメっているので油断は禁物だ。初っ端の事もあって巻きも交えて越える。その先にも滝が現れ、息つく間もなく20m二条の大滝と出合う。

二条の滝と記したがそう言われている だけで、実際は水量によって三条だっ たり(今日はそうだ。) 五条だったり している。

ここは水流の右から直登が可能だが今回は水量も多いので大人しく左岸を巻く。(前に来た時は直登した記憶がある。)

滝上はナメとなり何となく奥秩父風で中々いい感じ。小滝をシャワーで越えると岩壁を割るような直瀑が姿を現す。「白龍の滝」25mだ。登れそうな代物ではない事は一目みれば納得。

左岸側に落口に向かってバンドがあり それを登る。上部は急な狭いグズグス の凹角で始末が悪いが、うまい具合に 木の根が出ているのでそれを頼りに乗 っ越す。

その先は釜を持った小滝が続いていて 奥秩父の五つ釜のミニ版、といったら 言い過ぎか。

志満さんが果敢に釜に入って抜けて行 くのでこっちも引きずられるように釜 に入るっかないね。

沢を進んでいくがこんなとこあったか なぁ...、という感じで楽しめる。

下部がえぐれた滝は左岸を巻く。暫く 平瀬が続き、二俣っぽいところを過ぎ ると再び滝が続く。殆ど水流沿いに登 れ楽しめる。

15mの直瀑が現れる。水量が少ないので見栄えはしないし、いかにも脆そうな感じで躊躇なくこれは巻きでしょう。 急なグズグズの草付で嫌らしい。(ここの高巻きは大体こんな感じ。)

奥の二俣を左に入ると源頭の雰囲気になり、締めの 5mの滝。登れそうな感じだがどうせモロくてヌメっていそう、

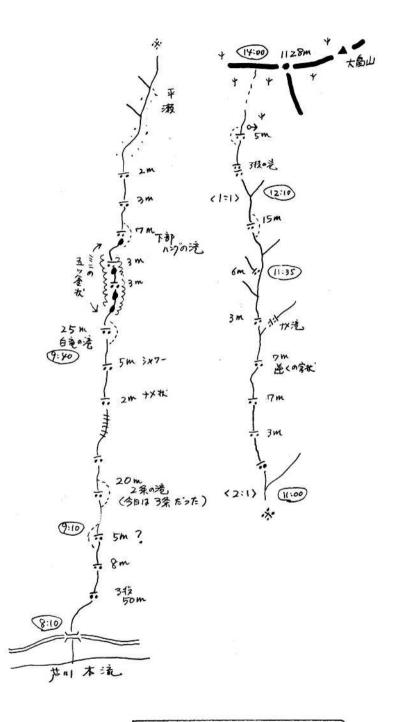
と取り付きもせず右岸から巻きに入る。 が、意外に悪くて、落ち口にトラバー スできないまま上に追い上げられ、漸 くトラバースして 20mの懸垂で沢に 戻る。ちょっと安易な判断だったな、 と反省。

直に水流とともに沢形が消え、ほんの一登りで稜線の登山道に出る。

稜線は疎林の間から木漏れ陽がさし、 涼しげな風が吹いてザックに腰を下ろ したままのんびりしてしまう。志満さ んも「いい沢でしたね。」という。「確 かに。」 中継ぎ投手としては十分、そ の役目を果たしたといえるだろう。 さて、下山。稜線から芦川側に下るル ートは地図上では2本の破線が支尾根 に記されているが共に廃道だ。が、下 りはどう下っても知れているだろう、 と余り気にかけず、手近な1128mピー クの支尾根から下る事にする。 ここで志満さんがGPSを取り出す。 踏み跡のない尾根を下る場合、小広く なったところから同じ方向に尾根が分 かれていると中々判り難いものだが、 志満さんはGPSを見ながら右に、左 にと的確に下っていく。

恐れ入りました。GPSの威力に感服です。全く迷う事も無く間もなく仕事道らしいものにで、入渓点の僅か下流にとびだし遡行を終わる。

「濁沢」は敢えて沢シーズンの最盛期に入るまでも無いが、内容的には悪くないので今回の我々のように、天候不安で代替の沢を考える時には、候補の一つとして頭の片隅に入れておいてもいいと思う。



09年 7月26日 御版/芦川·濡沢